

20
62
THE PERSONALITY OF GOD

By Rev. J. D. DAVIS, D.D.

神の性格

博士ゼ、デー、デビス著

東京

警醒社書店發兌

020344-000-3

特15-973

神の性格

ゼ・デー・デビス/著

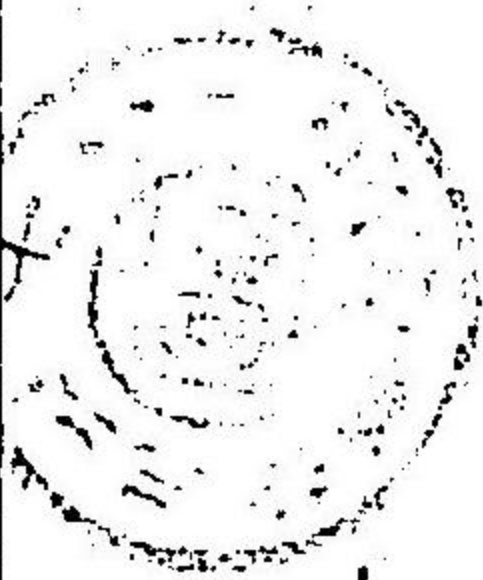
M32

ABI-0150



神の性格

神學博士ゼーデーデピス



碩學マルチノリが西洋の東洋に對する最大贈物はベルソナリチーの
 觀念ありと云ひつるは蓋し名言あり、波羅門教及び佛教は東部亞細
 亞に黒衣を投じて之れを掩蔽し、神のベルソナリチーも、人のベル
 ソナリチーも之が爲に共に朦晦せられて殆んど消磨せり。即ち佛教
 は教ふらく人生は猶ほ水泡の如し、纏て法界の逆捲く浪に吸收せら
 れん。而して法界亦是れ夢幻のみと。怪しむなかれ、日本語には

近頃まで此のベルソナリチーに充つへき譯語なく、亦ベルソナリチ
 ーてふ明白の觀念の存せざると譯者曰くベルソナリチーは有心性と
 譯せらる。されど余は尙ほ其適否に惑ふ。是れ原音を存じ置く所以
 なり。

さはいへ西洋諸國にても神のペルソナリチーを疑ひ、又之を否定する哲學なきにあらず。今や東洋の凡神論は次第に西人の心に喰ひ入りて之を腐蝕しつゝあり。

ヘルバート、スペンサー氏はバルフォール氏の辯論に批評を加へ、

將に其文を結ばんとして自家と同臭味なる不可思議論者に就て辯じて曰く、『不可思議論者は嘗に三千萬の太陽によりて出現したる全能者と、アブラハムと約束を整へしといふが如き荒唐ある舊思想を捨てしのみならず、又雷に嫉妬、忿恚、復讐等の劣等なる情慾が無限者の中にも是れありといふが如きとを信せざるのみならず、たゞ如何はと高尙の心術ある人も無始無終にして無所不在なる者の存在を確信するに由なしとの最終結論に達したり。さりとしてこは好んでするとはあらず、寔に止むを得ざるが爲めなり。若し然からずんば、只自ら欺くの外なきが爲めなり。宇宙の大に比すれば地球は一

小粟粒のみ、されど我等は是等の一小粟粒中に住居して無限に微小なる粟粒なり。我等之を自覺して豈愉快とするものならんや。無常變遷の此世に生息して救治の途なき苦痛を受くるもの、誰か太陽をも滅ぼし、小動物をも殺して無感無情なる勢力に弄ばるゝを知りながら、争で心に慰藉を感ずることあるべき。宇宙は其始や知り難く、其終も測り難く、其目的亦詳かからずと考へたればとて、満足を得らるべきやうもなし。此の凡ての事を知らんとするの志望は、不可思議論者敢て他の人々に譲るものにあらず、深く彼等に同情を寄するものなり。憾むらくは自ら之が解釋を發見するに由なくして、又他の唱道する説明をも承認するの力なきことなり』と。(中畧教授ローマチイスは臨終の前に至りて疑惑全く霽れたりしが、其尙は暗雲の中に鎖されたる際いへるとあり、曰く『人生貴ぶべきもの皆悉く消散しぬ』と。(中略)神は詩第五十偏の二十一節に於て宣はく『なんぢ我をれ

神の性格

のれに恰にたるものどれもへり』と。是れ我等が神てふ思想に就ての最大困難の伏する所あり。斯の如くに神人同形的に神を觀るとは古今神學上の書籍多くは然り、而して是れを懷疑説、偏理説、凡神論等など今日の教會を腐蝕せしむる諸説の發生する一原因なりける。神は以賽亞五十五章八、九に於て、神人の間に大相違あることを宣べて曰く『わが思はなんぢらの思とことなり、わが道はなんぢらの道と異なれり。天の地よりたかさがごとくわが道はなんぢらの道よりも高く、わが思はなんぢらの思よりもたかし』と。

斯くの如き明白の聖言あるにも拘らず、我等神のペルソナリチーに就て考ふる時は、自ら我等の如き人類のペルソナリチーと相等しきものとして考ふるを免れず。

ペルソナリチーとは何ぞや。今其の要素の幾分を擧げんに、智慧、感性、意思、自由、道德力、自覺力等是れなり。大凡そ道德的制裁

神の性格

の下にありて自由に推理し、感覺し、意思する人又自覺の力を具へたる人之れを名けてペルソン(有心者)といふ。果して然らば神のペルソナリチーとは何ぞや、右に擧げたる人類のペルソナリチーの六箇の要素を取り、之を無限に倍加して其積を神のペルソナリチーの定量といふべき乎。

神のペルソナリチーは極めて不充分ながら。先づは左様のものなるべし。されどそれより以上にもあらず、又それに相違なきかといふに然らず。我等錢に乗するに幾倍かを以てする時は、遂に増して若干圓となるべし。之と等しく人類の智慧に乗するに無限數を以てする時は、一種名分の異なる智慧とならん、否確かに高等なる名分の智慧となるべし。獨り智慧にのみ止まらず、感覺も然り、意思も然り、其他のものも亦然り。而して斯く無限に倍加せらるゝものは常に作用のみならず、此等の作用を發する本体も亦然るとを記臆す

神の性

る時は、一層其の確かなるを知るべし。推理も、感情も、意思も、
 道徳的自由も、自覺力も皆是れ現躰より發する作用にして、現躰を
 離れて別に存在するものにあらず。されば神のペルソナリチーに就
 て考ふるに當りても、無限に倍加すべきものといふは作用にあらず
 して現躰なりとす。

今此に一現躰ありてAを以て之を代表するとせよ、而して之を倍加
 するや無限數を以てすとも、其のAは猶ほ他のAと等しき方針に據
 りて智慧、感情、意思等の作用を發すべきか。否々無限のAの作用
 は有限のAの作用と同じかるべきにあらず、却て非常に相異せる
 ものたらざるべからず、恐らくは無限に相異せるものたらざるべか
 らず。其現躰も、其存在の模様も亦相異せるものたらざるべからず。

今此に(人靈の知れるたゞの智慧又感性又意思又自由又道徳又自覺力)
 に無限を乗するといふ一公式ある時は、之を神のペルソナリチーを

7 神の性

代表するものと心得て然るべきや。否々然らず、而して其理由は、
 前にも述べたる如く無限に倍加せらるゝものは現躰にして其作用に
 あらずといふと是れなり。然れば亦問はん、無限の現躰は有限の現
 躰と同様のペルソナリチーを以て存在し、亦同様の作用を發すべき
 乎と。手を以て之れを見れば、此問に對しては蓋然的に否と答ふべ
 きのみならず、斷然否と答へざるべからず。『エホバ宜くわが思はる
 んぢらの思とことなり、我が道はなんぢらの道と異なれり。天の地
 よりたかきがごとくわが道はなんぢらの道よりも高くわが思はなん
 ぢらの思よりもたかし』

余にして若し神のペルソナリチーを言顯すため一の公式を書くべき
 とどならば、即ち只一あり、無限に乘するに(人靈の知れるたゞの智慧又
 感性又意思又自由又道徳又自覺力)を以てし而して尙之にX即ち人
 智の及ばざる不可識を乗じたるもの是なり。此のXは何を代表する

ものなるか我等之を知るとを得ず、されど我等が概念すると能はざる能力と作用と生存と模様とを代表するものなるとは、余の信じて疑はざる所なり。我等は人爲の公式、人爲の尺度を以て我等の創造者、維持者、亦愛護者たる無限者に適用せんとすることあり、されど之を適用せんとするに方りては、我等の尺度その用を爲さず、之を抛ちて呆然其前に自失せざるとなし。我等キリストと聖靈の助けに由りて天の父と交通し奉るや、次第々々に無限者の性質の長さ、廣さ、高さ、深さを明らむるを得。されど到底充分に之を測量すると能はざるなり。我等は只是等の眞理を益深く確信し、人口に膾炙せる左の詩を謳ふの外あらざるなり。

“Our little systems have their day, They have their day, and cease to be;
They are but broken lights of Thee, And Thou, O God, art more than they.”

此の問題たる我等が基督教徒として思想し、生活し、動作する爲め

に實際的なる、重要な、根本的の關係ありて存するあり。先づ三位一體、キリストの神性、聖靈のペルソナリティー等の諸大問題を考一考あれ、此等の問題を疑惑し、若しくは否定する人は、神を神人同形的に考ふるよりしてさては此の困難に遭遇するに至るなり。

彼等の神を見るや、餘りに低く又餘りに狹隘なり。神若し斯る人々に對して語り給ふとありとすれば、恐らく其會て詩篇記者及びバイザヤに言ひ給ひつる如くに宣ふべし、『曰くなんぢ我をねのれに恰まさにたるものどねもへり』されど天の地よりもたかきがごとくわが道はなんぢらの道よりも高く、わが思はなんぢらの思よりもたかし』と。

されど神は遂に思惟すべからざるものと思ふとなかれ。神の存在とペルソナリティーとは天の地よりも高きが如く我等の存在とペルソナリティーとよりも高しと雖、已に我等は此の無限者に就て考ふるとい

ふの事實は、父、子、聖靈ある三位の神の存在と作用とを不可能的、不蓋然的の範圍より拉出して、之を蓋然的の問題の範圍に置きたるものなればなり。

我等は先天的に無限の神の存在及び作用の状態を推論すること能はず、されど其存在と作用とは我等が固有の存在及び作用と殊別なるとは我等が理論上確知し得る所なり。此を以て神は己れを我等に啓示し給ふに方り、複數的人格を具へ給へども而も一躰に、父と子と聖靈の三を具へ給へども而も其計畫と其意思とは全く一致せることを顯はし給はゞ、我等は決して驚くべからず、躊躇ふべからず、只應さに唯々として此の大眞理を承認すべきなり。我等は此の地球と稱する宇宙の中の小石に過ぎざるものゝ上にて、能く複數的人格を具へ、其相互の思想、感情、計畫、目的、意思、皆全く一致適合し、之を一躰と稱するも、將た一人と稱するも差支なきほどの有限物を

見たると未だ是ならず。さればとて我等が靈魂の父にして、又無量無邊の宇宙を初め、物質と道德とを創造し、維持し、活動せしめ給ふ無限者までが、亦斯くの如きものならずといふを得るか極めて然らず。大凡そ此點に就て尙は疑惑を抱ける人は、神人同形的に神を解するの餘其を脱せざるものにして、昔の詩篇記者と共に『あんぢ我をれのれに恰まさにたるものとおもへり』どの神の譴責を免かるゝ能はざるものあり。是れ畢竟その見解の淺薄狹隘なるの罪にして、若し斯る見解を墨守する以上は、三位一躰といへるが如き微妙なるペルソナリチーあることを否定すること勿論必然のことなりとす。

さて神のペルソナリチーを承認する以上は、亦奇蹟を承認せざるべからず、我等は自然神教に拘泥するものにあらず、又凡神論に束縛せらるるものにあらざるなり、神は超然として宇宙の諸勢力の上にあるものにあらず、又之と無關係のものにもあらず。又神は是等の諸勢

力より成れるにもあらず。又我等が呼んで自然法と稱するものに束縛せらるゝものにもあらず。神は自ら無限の勢力と、無限の自由と、無限の方案とを有し給ふ。若し夫れ宇宙を創造し、又之を維持し給ふほどの無限のペルソナリチーが、人類の如き近眼者の日常見おれたるとの外何事をもなさずとすれば、却て奇怪至極のといはざるべからず。

されば無限にしてペルソナリチーを具へし神といふ以上は、之に奇蹟を行ふの力ありとすると素とより當然なり。故に奇蹟の解し難きにはあらず、奇蹟を行ふ神の解し難きなり。奇蹟を疑ふ人といふは、畢竟未だ無限のペルソナリチーある神の存在を事實として明白に承認せざるに座するのみ。所謂る自然法なるものは是れ神が其勢力を發表し給ふの常道なり。又所謂る奇蹟とは神の非常なる自己の顯現なり、言を換へていへば異常方法もて其勢力を發表し給ふとなり。

神の性の格

黙示に就ても亦斯くの如くいふとを得べし。若し夫れ天の父にして其創造し給ひし諸子に對し、仁愛注意至らざる所なく、人間の父母の愛に比すれば更に無限に優れるものありとすれば、其己れを我等に黙示し給ふとも、苦心誘惑の中にあるものを扶助、獎勵、救済し給ふとも決して怪しむに足らざるなり。我等は當然斯る黙示を望むことを得。我等は當然世の初めよりして、即ち人類が神の形に作られし當初よりして之を望むとを得。

神の性の格

神のペルソナリチーと父たることを明了に悟る時は、罪惡の實在と重大とを知るとを得べし。之に反して神のペルソナリチーを朦朧たらしめん乎、随つて又罪の觀念も朦朧となるべし。今日流行の凡神論の如きは是れ神のペルソナリチーを曖昧にし、罪の觀念を滅殺するものなり、されど若しペルソナリチーある天の父てふ觀念よりして罪を考ふる時は、贖罪の必要又疑ふべからざるに至るべし。而し

て此の贖罪は人間の理論を以て割り出したるが如き淺薄のものにあらず。贖罪とは人類の構成する凡ての理論に超絶して、遠大、廣濶、高崇、深遠の意味を有するなり。抑も罪人の心を鎔解し、之をして神に復歸せしむるの施設は固より必要なり。されど是れのみにては充分ならず、尙ほ又大なる萬物の父たるもの自ら如何にかして、否寧ろ最上の方法もて、其罪を憎むとを發表し、且つ罪の加へし汚點を拭ひ去るの施設をなさざるべからず。げに神の大なる御心は斯る施設をなし給ふまでは安堵するとは是れなかりしなり。過ぎにし明治廿九年の三月、鳥取の舊城下に於て一箇の悲惨なる事件ありたり。其事の由をいはんに、或る由緒ある士族の家に生れし娘、圖らずも邪なるをなしたりしに、母は之を知りながら、父にはそれと打ち明かさざりき。已にして父の之を知るや、一夜白刃を掉ふて先づ其妻を殺し、次で娘を斬り、最後

に自刃して果てたり。是れ其父は一族及び家門の汚點を拭ふの道、斯る慘劇を行ふの外あらじと感せし爲めと知られたり。されど無限の天父は決して自刃し給ふものにあらず、さりとして又罪惡を憎むとをのみ發表して、其一族の汚點を拭ひ去るの施設をなすとなかるべきか、極めて然らず。神は人間の父よりも遙かに高尚に、遙かに純潔に、遙かに尊貴なるを以て、罪の爲めに設け給ふ計畫も、人間のなす所に比して遙かに高尚、純潔、尊貴、有効なるべきなり。然るを若し神は冷然手を拱き、又何事をもなすとなしと想像するが如き人あらば、是れ取りも直さず神のペルソナリチーを疑ふものにして、又到底之を悟了するの期あらざるべきなり。我等一たひ神のペルソナリチーを會得し、我等の所有せると同じ諸徳を所有して而も無限に優等なるとを認識せば、キリストの降世は怪しむに足らず、其のゲッセマ子の憂悶、カルバリ山の苦痛亦驚くに足らず、天使のキリ

ストに扈從したることも亦其の誕生と臨終の時の奇事及び異象も、共に怪しむに足らざるなり。

又神のペルソナリチーを明かに認識する時は、我等が聖書に對する觀念一變し、之を仁愛なる天の父の使命として一層現實貴重のものとするに至るべし。

神は聖書の中に教へられたるが如き自己の眞理と、意思と、人間行爲の法則とを默示するため充分の準備を整へ、且つ此の默示を丁寧に保存し給ふといふとを信ずるは決して難事にあらず。我等は聖書の超自然を删除し、又神の用意、神のインスピレーションを滅殺するよりも寧ろ之を増大するとを本意とするものなり。我等は教會、聖書を作り、聖書、教會を作りしにあらずといはんよりも寧ろ神自ら教會と聖書と兩つながら之を作れりといふことを信じて安心するものなり。聖靈即ち眞理の靈は聖書と教會の中に住み、之を活動せ

しめ、之を訓練することを信じて安心するものなり。神は其王國を成就する爲めに特別の成案ありて、教會と聖書の兩者を利用し給ふべきを信じて安心するものなり。尙ほ又神のペルソナリチーを充分に認識する時は、聖靈のペルソナリチーも自ら明確となり、而して其ペルソナリチーを疑ふことなく、否定することなく、無視することなく、又只無限不可思議の勢力のみ思ふことなく、却て我等の救主の約束に應じ、『我等と共に居り、我等と共に歩み』我等と共に働き給ふ訓慰者、教師、案内者と崇め奉るに至るべし。また神のペルソナリチーを確認する時は、更生は眞實の新生となるべく、人の靈魂に入り來るべく、我等の生命、我等の光、我等の力、我等の案内者として我等の中に住む天來の客となるべし。斯くてこそ我等は天の仁愛無限の父に祈るべく、徒らに苦痛を忍ぶことなくして『隠れたるに見たまふ』父として之に祈るとを得べけれ。之と等しく我等は亦

神の生命に進歩すべく、而して常に生命を所有するのみならず、一層豊かに生命を有し、又多くの果を結ぶを得るに至らん。さりとしてこれは凡神論にはあらず、是れ神の一部などなるにはあらざるなり。又我等は之によりて一層自己のペルソナリチーを確認するに至り、又神の子としての無限の價値を自識するに至るべきなり。尙ほ又神のペルソナリチーを明かに信仰する時は、我等自ら希望を生じ且つ我等の前途に横はる永遠の來世全く判明すべし。我等は亦我等の爲めに多くの住家を設けて我等を歓迎せんと約束し給ひし主の顯現を待ち望むに至るべし。我等は亦無限無際之樂園にありて天の萬軍に圍まれ、主と共に永遠同住するの希望明確となり、如何なる苦痛の中にも、如何なる悲哀の中にも心に充分の慰藉を感じ、現世にありて主の爲めに無二の忠信を勵むの心を生じ、諸の試誘と經驗とは切磋琢磨の基礎として之を甘受するに至るべし。

夫れ神のペルソナリチーは以上開陳したる如くに重要なる、基本的の事實なり。基督教の諸の事實にして一も之と無關係のものはない。若し之を曖昧ならしむる時は、基督教は全躰曖昧となり、若し之を充分に確認する時は基督教の眞理悉く皆之を掌に指すが如くなるべし。然るに日本の思想界は凡神論的の傾向盛んにして、自ら神のペルソナリチーを明認すると難く、随つて又神學上の異説の流行を來せり。

日本の基督教々役者に取りて精神の素養のため、心術の練磨のため、最も必要のとしは、理論上、實際上神のペルソナリチーの大眞理を確認し、此基本的事實を他人に傳へ、彼等をしてキリストのため、人類のため、信仰と愛と仁義の基礎を作らしむる資格を養成するよりも急なるはなし。而して此の資格を養成するとは理論として之を信するに由らず、又知識上の概念として之を保持するによら

す、只之を精神的に考へ、精神的に保有するに由る、又心に神と一
致合躰するに由る。

神の性格終

明治卅二年六月廿七日
明治卅二年六月三十日

著者 デビス

發行者 東京市京橋區采女町廿四番地
福永文之助

印刷者 横濱市太田町五丁目八十七番地
村岡平吉

發行所 東京市京橋區采女町廿四番地
警醒社書店

印刷所 横濱市居留地八十一番館
福音印刷合資會社

